

ポップカルチャーとしてのヴィジュアル系の歴史

柏木 恭典

The History of Visual-kei as Pop Culture

Yasunori KASHIWAGI

はじめに

本研究ノートは、現在世界的に注目されているヴィジュアル系 (Visual-kei) の歴史をまとめたものである。ヴィジュアル系の創始者は、X (1982～:後にX JAPANと改名) やLUNA SEAといわれることが多いが、その考え方は非常に一面的で、強いバイアスがかかっているように思われる。ヴィジュアル系の歴史を踏まえると、単純に上のようにはいえないはずである。また、ヴィジュアル系が海外でどのように語られているのかについても言及する。ヴィジュアル系をいち早く自国に取り入れたドイツの言説を取り上げる。

1 ヴィジュアル系の誕生前夜

通常、ヴィジュアル系ロック (以下、ヴィジュアル系) の創始者は、Xといわれているが、Xを含むヴィジュアル系ロックは、いったいどのような音楽的なルーツをもっているのだろうか。まずは、ヴィジュアル系を築いたロックの歴史的背景を辿ってみたい。

ヴィジュアル系と呼ばれる音楽ジャンルは、広く80年代～90年代に確立されていった。厳密な意味では、1994年～1995年頃から「ヴィジュアル系」という用語が独立して使用されることになったが、一般的には、80年代後半に登場したXと共にヴィジュアル系が誕生した、と考えられている。筆者はこの考え方に批判的である。この点については、第二節以降で詳しく論じていくことにする。

80年代

Xが台頭した80年代の日本には、既に無数のバンドがロックシーンに存在しており、X JAPAN以外にもヴィジュアル系誕生のきっかけを作ったバンドがたくさんいた。この時代には、直接ヴィジュアル系に含めるこ

とはできないにせよ、44MAGNUM (1977?～)、EARTHSHAKER (1978～)、AUTO-MOD (1980～)、BOOWY (1981～)、UP-BEAT (1981～)、ラウドネス (1981～)、SABER TIGER (1981～)、GASTUNK (1983～)、AION (1983～)、DEAD END (1984～)、DER ZIBET (1984)、COLOR (1985～)、BUCK-TICK (1986～)、GRASS VALLEY (1986)、GARGOYLE (1987～) など、いわゆるヴィジュアル系バンドの原型/布石となるバンドが多数存在し、そうしたシーンの中で、Xも生まれてきた。ゆえに、一概にXをヴィジュアル系の創始者と呼ぶことには無理があるように思われる。Xを含め、この当時のバンドは、広く「JAPANESE HEVEY METAL」とカテゴライズされるケースが多かった。しかも、その多くが、欧米のロックミュージシャンやそれ以前の日本のロックミュージシャン (例えば、ラウドネスの高崎晃が在籍したLAZY (1973～)、岡野ハジメやポッピー神山が在籍したPINK (1983～) などの影響を受けており、さらに遡れば、ムッシュカマやつが在籍したザ・スパイダーズなどの影響もある。欧米をみると、80年代のロックシーンでは、スラッシュメタルを代表するMETALLICA (1981～)、Slayer (1982～)、MEGADEATH (1982～)、ANTHRAX (1982～)、デスメタルの祖Napalm Death (1982)、そして、グランジを代表するNirvana (1987～)、Alice in Chains (1987～)、そして、Visage (1979?～)、Duran Duran (1978～)、Culture Club (1981～) など、ヴィジュアル系誕生に強い影響を直接与えたニューロマンティック系バンドなど、個性的なロックサウンドが多数創造された時代でもあった。Visageというバンド名には、Visualという要素が含まれていたという説もある。

80年代の音楽シーンは、ヘヴィーメタル、スラッシュ

メタル、パンク、ポジティブパンクなど、様々な音楽が乱発していた。というよりも、音楽が一気に多様化される方向へと向かっていった。ロックという定義そのものが成り立たないほどに色々なサウンドが登場したのだ。その中で、ロックシーンにおいて一際目立っていたのが、ヘヴィーメタル～先鋭的なスラッシュメタルとニューロマンティック～ポジティブパンクという二つの音楽スタイルだった。特にヘヴィーメタル／スラッシュメタルは80年代前半に大ブレイクすることになる。Mötley Crüe (1981～)、IRON MAIDEN (1975～)、Ratt (1976～)、Poison (1983～)、Whitesnake (1977～) など、ワイルドで派手なバンドが次々にヒットしていくのであった—ただ、こうした派手なバンドのメンバー自体が、日本の歌舞伎に影響を受けているという説もあり、化粧とロックの関係性はそう単純ではない (J-BEAT, 2009:5)

これらのバンドは、70年代の音楽を踏襲するかたちで生まれたものであり、80年代のロックシーンを理解するためには、70年代のロックを知っておかなければならない。

70年代

70年代はヴィジュアル系サウンドの基盤となるサウンドが生まれた時代である。それは、1970年にOzzy Osbourne率いるBlack Sabbathが結成されることに象徴される。Black SabbathとJudas Priestはヘヴィーメタルの元祖ともいわれており、ハードでスピーディーでダークなサウンドの生みの親でもある。70年代に登場したヘヴィーメタルは、80年代にパンクブームと入れ代わる形で注目されるに至る。

70年代といえば、イギリスのLed Zeppelinを代表とする「ハードロック」の全盛期であった。彼らなしに80年代ロックは存在し得なかった。Led Zeppelinのルーツは、60年代のロックと黒人ブルースであった。彼らは、ロックとブルースを激しくドラマティックにし、音楽そのものの水準を一気に高めることに成功した。ただし、ヴィジュアル系の系譜にLed Zeppelinを含めることは、無理があるように思われる。サウンド的にもスタイル的にも、ヴィジュアル系の痕跡をみることはできない。

King Crimsonのギターワークは、ヴィジュアル系のみならず、後のギタリスト全般に影響を与えた。Xのギタリスト、PATAがPink Floydを好んでいたことは有名だ。Rainbow (1974～) は、Deep Purple (1968～) のギタリスト、Ritchie Blackmoreが結成したバンドで、ヴィジュアル系バンドマンらの間でも時折話題になっている。Rainbowのマイナーコードを使った切ないメロディーは、ヴィジュアル系のみならず、現代のロックの痕跡として生き続けているようにも思われる。Bon Jovi (1984?～) はこの時代のロックの発展形と捉えてよいだろう。また、ヴィジュアル系黎明期に活躍した日本のLADIES ROOMは、この70年代のハードロックの影響を強く受けた音を奏でている。ハードロック～ヘヴィーメタルのルーツは、80年代の日本のロックシーンを語る上では欠かすことのできないものである。

70年代前半は、演奏技術を極限まで突き詰めようとしたプログレッシブ・ロックがメインストリームとなっていく時代でもあった。Led Zeppelin以降、複雑で難解なYes (1969～) やRenaissance (1969～) が台頭してきた。彼らの演奏技術は卓越していた (そうしたプログレッシブの流れの反動として登場したのが、70年代後半にブレイクするパンクロックである)。このプログレッシブ・ロックの影響は、技巧派ヴィジュアル系バンドのSHAM SHADEに見ることができるだろう。また、Jeff Beckの存在も無視することはできない。70年代前半はギターの進化・ギタリストの発達をも促した時代でもあった。

そんな70年代前半のプログレ・ブームに反旗を翻し、全く別の音楽形態を打ち立てたのがSex PistolsやThe Clashだった。とりわけ、70年代から80年代にかけて絶大な人気を博したThe Clashの存在は、ヴィジュアル系の系譜を捉える上で無視することはできない。彼らは、パンクにカテゴライズされるが、その音楽の多様性やメンバーのスタイルはヴィジュアル系ルーツにかなり大きな影響を与えている。

70年代はいわゆるブルース・ロックが解体し、新たな要素がロックにどんどん取り入れられた時代でもあった。また同時期に、世界中の後のミュージシャンに影響を与えたグラム・ロックも芽生えた。その中の一人、

David Bowieはヴィジュアル系の神様ともいわれている。当然、この同時代のPoliceやQueenなどの存在も無視できない。

60年代

70年代は、まさにLed Zeppelinで幕を開けたのだが、もちろん70年代に突如として彼らが生まれたわけではない。70年代の流れを作った立役者に、60年代のブルース・ロックの代表格、Cream (1966) がいる。Creamには、Eric Claptonが在籍していた。Claptonの信奉者はヴィジュアル系の中にもおり、またヴィジュアル系アーティストの憧れとなったギタリスト自身がClaptonから多大な影響を受けていた一ゆえに、初期ヴィジュアル系バンドの中には、ブルースのテイストを盛り込んだ曲を演奏するバンドもいた。Creamは、ジャズとブルースの要素が強く、サウンド的にはヴィジュアル系とは何のかかわりもないように思われる。ただ、70年代のハードロックの礎を作ったバンドだけに、無視することはできないはずである。しかし、それはロック全体の歴史にかかわるものであり、狭義のヴィジュアル系の系譜に含めることは難しい。60年代に、黒人音楽を白人たちが取り入れて改良したものをブルース・ロックというが、そのブルース・ロックが70年代以降のロックのルーツとされている。

また、1968年に結成されたDeep Purpleの存在も無視できない。ハードロックやヘヴィーメタルのルーツともされており、Deep Purple抜きにロック史を語ることはできない。彼らのサウンドは、クラシックの要素を取り入れたクラシカル・ロックといわれている。60年代のロック全盛期の影響を受けつつ、黒人音楽のテイストを引き下げ、先鋭的なサウンドを作ることに成功した。日本のJanne Da Arc (1996～) のサウンドはDeep Purpleに通じるものがあった。

周知のように、ロック創成期の60年代の代表的バンドは、The Rolling Stones (1963?～) である。The Rolling Stonesもやはり黒人ブルースを取り入れ、自分たちなりに解釈しなおしたバンドだった。同様に、60年代はThe Beatles (1960～) の時代でもあった。The Beatlesのデビューは1962年であり、その後1970年に解散している。

また、Jimi Hendrixのギターワークは、ヴィジュアル系バンドのみならず、現代のあらゆるギタリストの青写真となっている。ハードなサウンドを売りとするバンドとしては、MC5 (1965?～)、Blue Cheer (1967～) らがいた。60年代後半は、70年代以降にブレイクするプログレッシブの黎明期であり、演奏技術に長けたアーティストが多数出てきた。The Doors (1965～) は、ヴィジュアル系の言語的側面に少なからず影響を与えているようにも思われる。

他方、パンクの歴史もやはり60年代に遡る。60年代後半、アメリカで生まれたガレージロックからパンクの歴史が始まった。パンクの要素もヴィジュアル系の系譜に欠かせない。既に挙げた70年代のパンクシーン、例えばNew York Dolls (1971～) やSex Pistolsの思想はヴィジュアル系ミュージシャンに強い影響を与えた。New York Dollsのパフォーマンスやルックスは現在のヴィジュアル系に通じるものがあるし、Sex Pistolsの代表曲“Anarchy in the U.K.”はX率いるエクスタシーレコードのイベントで必ず演奏されていた。

2 ヴィジュアル系創成期の地平

では、ヴィジュアル系の起源をどこに見出せばよいのか。ヴィジュアル系という語はどのようにして使われるようになったのか。

手元に、1990年に発行された『RANDAM』というインディーズのロック雑誌がある。この雑誌の表紙を見ると、「Coming Soon! Hard Shock 90」と書いてあるが、ヴィジュアル系という文字はない。ヴィジュアル系を扱う雑誌を振り返ると、「ヴィジュアル系」という言葉は、1994年頃から使用されるようになっており、このRANDAMを読むかぎり、まだ90年頃には使用されていないことがわかる。とはいえ、もともとこの時代のロックシーンでは、「～Shock」と明記することを好む傾向があった。上の雑誌は、ジャパニーズ・ヘヴィーメタル／ハードロックの専門誌なので、「Hard Shock」となる。Visualという言葉は確かにXのスローガン、「[psychedelic violence crime of visual shock]」のvisual shockに由来していると考えられているが、このvisual shockという言葉自体、当時の言語感覚からすれば、か

なり自然なものだったというべきだろう。ヴィジュアル系の語源であるvisual shockという概念は、既に1980年代末には既に想定可能な状態にあったといえよう。hard shock, heavy shock, metal shock, beat shockなど、これらの言葉がどのようなシチュエーションで使用されていたかは不明だが、こうした言語感覚は特別なものではなく、同時代的なものだったと考えるべきである。その中で、とりわけXは、視覚的要素にかなりのこだわりをもっていた。わざわざ髪の毛を逆立てて、毎回ライブをやっていた—ただし、この髪を立てるという行為は、BUCK-TICKもほぼ同時期（1986年頃）に行っており、どちらが先かを語るのは難しい—。visualという言葉も、おそらくこの当時の時代精神から使用されたのではないと思われる。

ヴィジュアル系という語の使用は、確かにXのスローガンが基となっているが、ヴィジュアル系ムーブメントを包括する概念としては、LUNA SEA（1989～）を示す言葉として初めて使用され、LUNA SEAと共に育っていった言葉であった。ただし、1991年の時点で既にLUNACYは存在していたが、彼らの音楽ジャンルは「NON CATEGRISE MUSIC」とされていた（『ロッキンフ別冊 恐るべき子供達』、p.113）。また、1993年に出版された音楽専門雑誌（SHOXX）別冊『SHOCK AGE』においても、黒夢（1991～）やLA'rc en ciel（1991～）が数ページにわたって紹介されているにもかかわらず、ヴィジュアル系という言葉は見つからない。「ヴィジュアル&ハードショック」が使われているのみである。ヴィジュアル系という語は、94年～95年頃に広まり、後にLUNA SEA、X JAPAN、黒夢、LA'rc en ciel、GLAYといったバンドを後付的に説明する概念として作られた、ということはあるだろう。1996年の『オリコン・ウィーク vol.18』では、「ビジュアル・バンド大特集」が掲載されており、1996年にはヴィジュアル系という用語が使用されていることが確認できる。この特集においても、上記のバンドが挙げられている。

だが、こうした一般的な見方に反対する声もある。「体育会系のようなニオイを放っているなかで、ひと組だけ文化系のサークルのような雰囲気异彩を放っていたのがZikillだった。独特の空気感を持ったサウンド

と、不思議な世界観は、彼らこそ現在のヴィジュアル系の直系の始祖であったことをうかがわせる」（別冊宝島 X JAPANの総軌跡、pp.36-37）と、大野祥之は述べており、X、LUNA SEAに起源をみることに批判的な意見もある。筆者はこの大野の意見に同意する。従来の「アナーキズム」や「ヤンキー文化」を踏襲するXやLUNA SEAにではなく、文化的で自己の内面世界を強く打ち出したZI:KILL（1987～）こそ、後のヴィジュアル系バンドのモチーフとなったのではないだろうか。だが、ヴィジュアル系の歴史全体を見渡すと、さらに無数の重要なバンドがいくつも存在することが分かる。以下、具体的に述べていこう。

ヴィジュアル系史を考える上で、DIE IN CRIES（1991～）の存在を無視することはできないはずである。DIE IN CRIESは、後のヴィジュアル系バンドに決定的な影響を与える作品を世に出しながらも、それほど知られてはいない。まさに「無名だけど無敵だったバンド」である。このバンドが登場したのも、LUNA SEAと同時期であり、Xを中心にムーブメントを巻き起こした90年～98年の「過渡期・発展期」だった。イカ天・ホコ天を核とする空前のバンドブームの後、厳しい状況の中、次世代にバトンを渡す役割を果たしたのがDIE IN CRIESだったといえよう。ZI:KILLを脱退し、後にLA'rc en ciel に加入することになるドラムのYUKIHIROを考慮すると、まさにDIE IN CRIESは、二つの時代の点を線で結ぶバンドだったことが分かるだろう。楽曲のクオリティーやバンドの世界観やコンセプトを踏まえると、DIE IN CRIESは極めて優れたバンドであった。彼らの「nothingness to revolution」は、DIE IN CRIESの名義だが、実際にはヴォーカルkyoのソロワークだった。しかし、この作品の世界観や価値観や雰囲気は後のDIE IN CRIESとほぼ変わらないものであり、退廃的、近未来的、エレクトリック、無機質、ダークなコンセプトは一貫していた。

また、ヴィジュアル系の歴史の中で、最もヴィジュアル系らしいスタイルやサウンドを貫きながらも、表舞台に登場しなかったバンド、それがSILVER ROSE（1989?～）だった。このバンドは、90年代の前半に活動していたバンドで、インディーズバンドでありながら、

数々のワンマンライブを行い、全国的にも人気が高かった。SILVER ROSEは、当時の音楽シーンのよいところをすべて吸収して、それを自分たちなりに昇華させた稀なバンドだった。このバンド以降、名古屋のヴィジュアル系シーンが注目され、黒夢やSLEEP MY DEARやDIE-ZW3Eといったヴィジュアル系史に欠かせない後続バンドが続々と登場することになる。これら一連のバンドは「名古屋系」と呼ばれている。

このSILVER ROSEとほぼ同時期に活躍していたのが、Gilles de Rais (1989～)である。Gilles de Raisの初作品「DAMNED PICTURES」は、耽美で妖艶なゴシック・サウンドであった。「妖美・華麗なゴシック・サウンド」というのが彼らのキャッチフレーズだった。が、その後、彼らはXのYOSHIKI率いるエクスタシーレコードに移籍し、92年、「殺意」というアルバムをリリースした。93年にメジャーデビュー。94年には傑作「CRACK A BOY」をリリース。95年に解散。まさにヴィジュアル系誕生期～過渡期を駆けぬけたバンドだった。なお、「殺意」のジャケットは、その当時大人気だったZI:KILLの「CLOSE DANCE」のジャケットを意識していた。michiko kawataが描いた絵は、CLOSE DANCEの絵と極めて酷似している。また、メンバー全員へヴィーメタルを好んでいたということもあり、この当時としては破格の演奏力を誇っていた。そして、曲のテンポが速かった。勢いがあり、パワフルで、ZI:KILLよりもパンクとハードコアの要素が強調されていた。「DAMNED PICTURES」は、異国のポジティブパンクに傾斜していたが、「殺意」は、たしかにヴィジュアル系の雛型を描いていた。彼らは、また歌詞の世界においてもヴィジュアル系の基盤を作った。例えば、「迫害された頭の中 拘束されない心の底 心身分裂症の声で 裁かれる前に裁きかえす」という句があるが、こうした病的な世界観も彼らもたらしたものである。また、当時のアルバムのセオリーとして、1曲目には、1、2分程度の短くて激しい曲が欠かせなかった。BUCK-TICKのICONOCLASM、ZI:KILLのTERO、LUNA SEAのFATEなどである。本作のSUISIDEはまさに「ショートタイム・ファーストソング」の傑作といえるだろう。

3 90年代後半のヴィジュアル系ブームとその衰退

このように、89年頃から90年代中盤頃に、ヴィジュアル系の原型が作られた。とはいえ、この段階では、まだ一部のマニアックなファンしか、このムーブメントに注目していなかった。ヴィジュアル系ムーブメントが激変するのは、90年代後半である。すなわち、ヴィジュアル系バンドの空前の大ブーム時代とその後の暗黒期である。1998年頃、日本のロックシーンでは、「ヴィジュアル系バンド」が空前のブームと化し、圧倒的な支持を得ると共に、それとほぼ同時に、危機的状況に転落していくことになる。1999年、LA'rc en cielのメンバーが、NHKの音楽番組で「ヴィジュアル系バンド」と称されて、演奏を辞退したことは有名なエピソードである。98年頃を境にして、ヴィジュアル系バンドメンバー自身によって、ヴィジュアル系が否定される動きが激化した。

では、ヴィジュアル系ブームの時代には、いったいどのようなバンドがいたのだろうか。バンドの良し悪しは問わず、どんなバンドが「時代」の波に打たれ、厳しい時代を生きただろうか。98年末期～00年頃のヴィジュアル系暗黒期に活動していたバンドを列挙してみよう。

先述した「名古屋系」で最も成功したバンドであるFanatic Crisis、「キリストの涙」というインパクトのあるバンド名と高い演奏力で話題となったLa'cryma Christi、ヴォーカルIZAMの圧倒的存在感で一世を風靡したSHAZNA、妖しくてダークで退廃的なROUAGE、ヴィジュアル系サウンドに新たな要素を持ちこんだTranstic Nerve、独特な世界観とMichiの美しい声が印象的だったMaschera、「ブレイクアウト」という深夜番組から飛び出したD-SHADE、神秘性と暴力性でファンを魅了したPierrot、シアトリカルで圧倒的なパフォーマンスと存在感をもっていたMALICE MIZER、同じくシアトリカルで少女漫画から飛び出てきたような美形バンドのLAREINE、ポップで「かわいさ」を表に出したSOPHIAは、ヴィジュアル系ブームのまさに中心にいたバンドといってよいだろう。

さらに、Raphael、BAISER、S、JILS、ILLUMINA、

Neil、JURASSIC、PHOBIA、MELODY、Pleur、Ray、LUCA、CLOSE、La'Mule、emu、shame、ENDLESS、BLue-B、BLUE、Aliene Ma'riage、El'iphas Levi、Noir fleurir、All I Need、LAIDといったバンドが後に続く。これらのバンドは、まさにヴィジュアル系ブームの終焉期に活動していたバンドで、それ以前のブーム期とは全く異なる状況にあったと考えてよいだろう。演奏の技術面で難のあるバンドや、逆にかつて以上に演奏技術の高いバンドが乱立した時代でもあった。また、Xの時代のヤンキー精神は消え、ますますオタク的な要素を強めた時代でもあった—このヴィジュアル系のオタク化こそが、ヴィジュアル系の国際化とヴィジュアル系の発展を導くことになるのだが。

上述したバンドたちは、90年代末期～00年代初頭にかけて、極めて厳しい時代を生きなければならなかった。この頃から、ヴィジュアル系への「差別」も発生するようになる。「ヴィジュアル系=見た目のみ」というイメージも固定化された。だが、この厳しい時代を生き抜くバンドがいたからこそ、次の世代（ネオ・ヴィジュアル系）が生まれたといってもよいはずである。98年を光の時代とするならば、それ以後の暗黒期はいわば影の時代であった。しかし、影の時代を経て、ヴィジュアル系は不死鳥のごとくに生き残ることになる。

ヴィジュアル系を語る際に忘れてはならないことは、X JAPAN、LUNA SEA、黒夢、LA'rc en ciel、GLAYなど、ブームを牽引したバンドもいたが、その背後には数え切れないほどのバンドがあり、その数え切れないバンドの力によってヴィジュアル系が完成した、ということである。ヴィジュアル系は、一部の人間によって作られたものではなく、ファンを含め、多くの人の手によって育てられてきた音楽・文化運動であったといえよう。

4 ネオ・ヴィジュアル系時代の到来とその現在

前節で述べたように、98年のヴィジュアル系ブームの後、一気にマスコミ、メディアはヴィジュアル系を排除し、若い人々の間でも一気に熱が冷めていく。そして、一時は差別用語として、ヴィジュアル系が語られ

るようになった。スタジオやライブハウスのメンバー募集のチラシでも、「ヴィジュアル系NG」といった言葉がいたるところで見られるようになった。99年～03年頃は、ヴィジュアル系ミュージシャンであることが「恥ずかしい」と思われる時代だった。そうした受難の時代に孤軍奮闘していたのが、Vivid、Fatima、ラムール、S、デュールクォーツ、Phobia、RONDE、Vanillaなどであった。

しかし、その後、ヴィジュアル系は劇的な変身をするようになる。それが、ヴィジュアル系からネオ・ヴィジュアル系へという変身である。ヴィジュアル系とネオ・ヴィジュアル系の境界線はどこに引かれるべきか。この問題は非常に深刻かつゆゆしき問題であり、また非常に複雑な問題でもある。この変身は、ヴィジュアル系の国際化という問題と、ヴィジュアル系内部の変化という二つの要素が絡み合っている。まずは、後者の内部に目を向けてみよう。そして、次節で前者のヴィジュアル系の国際化の問題について触れたいと思う。

21世紀型のネオ・ヴィジュアル系時代の幕開けの名にふさわしいカリガリ、ムック、メリーらは、一度、バンド名を英語表記からカタカナ表記へと「ずらす」ことになる—ただし00年代末になると、再び英語表記のバンドや、英語にすらない造語的なバンドが再び増えてくる。例えば、12012、宇宙戦隊NOIZ、新興宗教楽団NoGoDといったバンドの名前が登場する—。これまでのヴィジュアル系の先入観を、わざとカタカナ表記にすることで、それまでのバンドの差異化を図ったのである。しかし、それ以前に、上記のバンドは、音楽的にも変化することになった。ヴィジュアル系ロックを、現代的なサウンドの地平に融合することで、新たな音の世界を築くことになったのだ。それが、ヴィジュアル系の国際化を導くことになる。

この新しい動きの源泉はいったいどこにあるのか。誰がどのような仕方ですべて新しい方向を切り拓いたのか。この問いに対して、ここでは一つの仮説を立てたい。それは、Dir en grey (1997～)の一枚のミニ・アルバムから始まった、という仮説である。ネオ・ヴィジュアル系発生の源は、彼らの問題作、「six Ugly」(2002)

に帰している、というものである。従来のファンの多くが、このアルバムを契機にファンをやめたというのは、ヴィジュアル系フリークの間では有名な話となっている。Dir en greyは、かつて90年代型のヴィジュアル系バンドだった。髪の毛の色も赤や青や金。派手で、メタルチックな衣装に身を包み、妖しい歌にマイナーコード中心の暗い楽曲。スカートも着用していた。デビュー曲では、XのドラマーYOSHIKIのプロデュースによる三枚同時リリース。まさに旧ヴィジュアル系の最後の後継者として華々しくデビューした。「Cage」は、黒夢に触発されたようなエッジの効いたヴィジュアル系王道の名曲だった。この時代のバンドの勢いがどんどん衰えていく中、次世代のヴィジュアル系の王者として名を上げようとしていた矢先に、問題作をリリースした。2002年7月31日だった。このアルバムは全6曲入りで、すべての曲がヴィジュアル系サウンドを全く感じさせない「奇妙なアルバム」だった。が、どの曲も徹底的に突きつめられており、曲の構成やコードワークなど、どれも不可解で魅惑的だった。本作全体を通して、その全てが過激で激しくて凶暴で暴力的で破壊的であった。当時、メンバーは、「自分達が育ててきた音楽性を押し殺し、特定の音楽ジャンルを徹底的に突き詰めることで、その音楽ジャンル（このアルバムなら、ミクスチャーやヘヴィネスサウンド）を、ナチュラルに吸収し、昇華することが出来る」と発言していた（引用元となる記事は現在削除されている。本ノートでは、この発言を残したブログ記事から引用した。参考文献欄参照）。この「昇華」こそ、新たな地平へのきっかけとなったのだ。

このアルバムは、実際のところ、国内でほとんど話題にはならなかった。だが、このDir en greyのメタモルフォーゼこそ、後のヴィジュアル系バンドマンたちに革命的大変革をもたらす事件だった。その後活躍することになるネオ・ヴィジュアル系バンドの音を聴いてみると、その節々にこのアルバムやそれ以降のDir en greyの楽曲の影響を受けていることが分かるだろう。ガゼット（2002～：現the GazettE）、ex-蜚蜚（1999～）、D'espairsRay（1999～）、ギルガメッシュ（2004～）、サディ（2005～：現Sadie）といった後続バンドは、多か

れ少なかれ、彼らの影響を受けている。海外で評価されたバンドも、まずはDir en greyや蜚蜚やD'espairsRayであった。ヴィジュアル系は、重厚な音と凶暴なイメージと圧倒的なパフォーマンスで、新たな新鮮さとインパクトを手に入れたのである。Dir en greyのこの変身こそ、ネオ・ヴィジュアル系の発端ではなかったか。2002年、奇しくも「ヴィジュアル系」という言葉が誕生してから約10年後、ヴィジュアル系は新たに生まれ変わり、再び息を吹き返すことになったのである。この流れを引き継ぐSadie（2005～）は、一般に、Dir en greyインスパイア系と呼ばれることが多いが、もっと広く捉えてもよいのではないだろうか。すなわち、DEAD END、D'ERLANGER、ZI:KILL、LUNA SEA、黒夢、Dir en grey、Merryという流れをもつ「黒服系バンド」と見なすこともできよう。ルックスもサウンドも声質もリフもDir en greyに酷似しているが、80年代のヘヴィメタルの要素を取り入れ、90年代の分かりやすくポップで哀愁を感じるメロディーを歌い、00年代のネオ・ヴィジュアル系の要素も取り込んでいる。そうした意味では、Sadieはヴィジュアル系文化の継承者と見なすこともできるかもしれない。

00年代中期以降、ヴィジュアル系はネオ・ヴィジュアル系となって蘇り、かつて以上の盛り上がりを見せつつある。2007年になると、90年代のバンド復活ブームも生じることとなった。D'ERLANGER、DEAD END、X JAPAN、LUNA SEA、黒夢の復活は、ヴィジュアル系全体にとって大きな起爆剤となった。とりわけ、X JAPANの復活には、誰もが驚かされたはずである。現在では、旧ヴィジュアル系世代と新ネオ・ヴィジュアル系世代が、お互いに刺激し合うかたちで、ヴィジュアル系ムーブメントに勢いを与えている。そして、2009年9月1日、NHKのMusic Japanで、ネオ・ヴィジュアル系の特番が放送されるに至った。

だが、さらにヴィジュアル系の内部では、さらに独自の進化を遂げている。それは、技巧派バンドたちの登場である。演奏力、ヴィジュアル、表現力、パフォーマンスすべてにおいてファンを圧倒しようとする完璧なバンドの登場である。そのきっかけは、Xの再来を予感させるGALNERYUS（2001～）の登場だった。技

巧派集団が、ヴィジュアル系の世界で活躍し始めたのだ。とりわけD (2003～)とVersailles (2007?～:又はVersailles-Philharmonic Quintet)の存在は極めて大きい。両者とも世界的に認知されており、共に旧新ヴィジュアル系を経験しており、その見た目も過去最高の派手さを有している。さらに、その後発組として、摩天楼オペラ (2007～)とDELUHI (2008～)が挙げられる。彼らも抜群の演奏力と華麗なヴィジュアルを特徴とする若手バンドである。00年代末期になり、X JAPANインスパイア系バンドが登場しつつあることは実に興味深い。

00年代末期のヴィジュアル系は、こうした一部の技巧派のHM系、シンフォニックメタル系、X JAPANインスパイア系バンドが圧倒しているかのように見える。だが、その背後では、無数のバンドがしのぎを削っているのもまた事実だ。アンド、ゾロ、lynch、OZ、Vistlip、キャンゼル、HERO、花少年バディーズ、Dog In The Parallel World Orchestraといった若手は、どのようなアプローチで、次世代のヴィジュアル系を構築していくのだろうか。

5 世界の中のヴィジュアル系

2007年にX JAPAN (1992年にXから改名)は再結成することとなった。メンバーがどのような背景で再結成を決めたのかは不明だが、少なからず「世界のファンの声」の影響があったと考えてよいだろう。皮肉なことだが、世界進出を目ざしていたX JAPANは、解散後に世界中で人気を得たのである。ギタリストhideの死も海外のオーディエンスにとっては一つのレジェンドとなった。X JAPANの解散から10年経ったが、その間に、ヴィジュアル系を取り巻く環境は著しく変わった。それが、「ヴィジュアル系のグローバル化」である。ヴィジュアル系のグローバル化は、90年代の欧州では考えられなかった。98年、筆者がドイツに住んでいたとき、ヴィジュアル系の話題は一度もメディアや雑誌で取り上げられることはなかった。もちろん日本アニメは普及されていたが、日本のヴィジュアル系音楽がヨーロッパで広まるとは想像さえできないことであった。

だが、00年代に入り、ヴィジュアル系は奇跡的に国境

を超えた。インターネットの普及と共に、特に2000年以降、ヴィジュアル系は、「Visual-kei」となり、海外のオーディエンスに受け入れられたのだ。その主な受け入れ先はドイツであった。ドイツが日本のヴィジュアル系をいち早く取り入れ、そこから欧州全土に広がっていった。とりわけDir en grey、Mucc、蜉蝣、D'espairsRayといったネオ・ヴィジュアル系世代のアーティストたちが次々に欧州公演を実現させていった。2005年、Dir en greyはドイツで単独公演に成功している。X JAPANの復活はこうした背景の中で起こった奇跡だったのである。それは、YOSHIKIのホームページやツイッターを見れば、一目瞭然だろう。彼は、海外のオーディエンスに向けて発言を続けている。2007年のX JAPAN復活は、単なる同窓会的な復活ではなく、新たな挑戦・途切れた過去の再生なのである。X JAPANが果たせなかった世界進出という夢は、インターネットの普及と共に、彼ら不在のまま果たされたのである。今後、ワールドワイドのヴィジュアル系を一過性のムーブメントに終わらせないためにも、X JAPANの課せられた任務は極めて大きいといえよう。

では、視点を変えて、ドイツの側から、このヴィジュアル系のグローバル化を考えていくことにしよう。

ドイツ文化論の中では、現代は、「POP CULTUREの時代」といわれている。つい数年前は、「POST MODERN時代」だったが、それに代わってPOP CULTUREが文化の中心となっている。その中に位置づけられるのが、ヴィジュアル系である。ヴィジュアル系が世界に広まった理由は、第一に、アニメ、映画、漫画との関連性・親和性であり、第二に、ネット環境が整い、日本国外にヴィジュアル系の世界が開かれたということであり、そして、第三に、「POP CULTURE」の思想の中にヴィジュアル系が入り込んだということである。ドイツ・フランスを中心とする欧州各国では、POP CULTUREの最先端として、日本のアニメや漫画が受け入れられ、それに連動するかたちでヴィジュアル系にも注目が集まったのである。ドイツのヴィジュアル系誌、「J-BEAT-The Japanese Pop Rock Magazine」では、ヴィジュアル系は、「音楽のカテゴリー」でなく、「美学一般」であると言いきっている (J-BEAT, 2009)。

また、同誌においては、この一連の動きは、「ヴィジュアル系運動 (Visual-Kei-Bewegung)」と呼ばれている。

かくして、ヴィジュアル系はまさに「現代思想」の只中にあるのである。ドイツにおいても、ヴィジュアル系は、単に「若者文化 (Jugendkultur)」以上のものがある、といわれている (ebd.)。もしかするとドイツ人をはじめとする欧州の人々は、バウハウスやパウルクレーのようなアートにはない、新たなアートの匂いをヴィジュアル系から感じ取っているのかもしれない。古典芸術も基本的には人間が描いたり造形したりしたものだ。同じように、ヴィジュアル系も人間が自らを音楽で表現する一つの手法である。その発生以来、ヴィジュアル系は「美」を激しく追求し続けてきた。美なくしてヴィジュアル系はない。かつては「見た目だけのへたくそバンド」と差別された時代もあった。しかし、今やヴィジュアル系の世界は、技術的にも、芸術的にも、感覚的にも、知性的にもより高くなければならない世界になりつつある。

いずれにしても、現代思想としてのPOP CULTUREやアートと結びつきながら、ヴィジュアル系は世界へと飛び立っていった。それは、一部の熱狂的な人だけに届いているわけではない。例えば現在のドイツでは、ファッションに敏感な若き女性たちの多くが髪を黒く染めている。筆者自身、何人かの若い黒髪のドイツ人女性と話をしたが、皆、ロックを聴かない普通の女の子たちばかりだった。「ロックはほとんど聞きません。髪を染めるのはなぜか? …それは流行り (Mode) だからです。それだけです」。つまり一般のドイツ人たちは無意識的に、日本的なものを流行として受け入れているのだ。ヴィジュアル系が欧州で受け入れられているというよりは、日本的なもの、アジア的なものが欧州の流行になっているのだ。その一つがヴィジュアル系ということになるのだろう。また、日本発のゴシック・ロリータ系の服やメイクも浸透しつつある。ドイツ女性人の場合、化粧で「ツリ目」にしようとする傾向もみられる。つまり、ヴィジュアル系は、単に音楽として世界に広まっているのみならず、ファッションやスタイルとして広まっているのである。

さらに、今度はドイツのWikipediaから、ヴィジ

ュアル系がドイツで一般的にどのように理解されているのかを探っていこう。その冒頭では、「日本では、ヴィジュアル系ミュージシャンのほとんどが、インディーズ音楽シーンに所属しており、音楽業界の中ではあまり経済的な意義はない。だが、国際的に見ると、ヴィジュアル系は日本のポップ音楽の中で最も有名な音楽様式にまで成長している」、と書かれてある (http://de.wikipedia.org/wiki/Visual_Kei)。この記述に、日本のヴィジュアル系理解と若干のズレも感じられる。「最も有名な音楽様式」という表現は、日本では想定しにくい。

Visual-keiの概念に関しては、次のように述べられている。「ヴィジュアル系という表記は、『visual』(ヴィジュアル的な、視覚的な)という英語の概念と漢字表記の『系』(系統、由来、血統、一派)という言葉で構成された言葉である」(同)。

ヴィジュアル系の主要素としては、「極めて派手で並外れたミュージシャンの外見」を挙げている。音楽的には「特定のジャンルに分類することができない」といい切る。つまり、外見的に派手だが、音楽的なジャンル分けは不可能なもの、とヴィジュアル系を特徴づけている。特にドイツ人の間では、ヴィジュアル系ミュージシャンのファッションが注目されている。「ミュージシャンたちは、例えばゴシックやパンク、さらにまたファッション化した学校の制服やファンタジーのコスチュームなど、極めて様々な流行的要素を組み合わせている」。音楽のみならず、ヴィジュアル系はファッションに関してもあらゆる「流行的要素を組み合わせている」という指摘は、確かに正しい表現の仕方だと思われる。ヴィジュアル系自体が、あらゆる流行的要素の融合形とも言えなくないのである。また、「ヴィジュアル系バンドは短期間で自分たちのスタイルや服装を変えることが多い」という記述もあり、よくヴィジュアル系を研究しているように思われる。

さらに、ドイツのWikipediaでは、「なぜ日本でヴィジュアル系が支持されたのか」という議論も交わされている。「日本では、個人の学校生活や労働生活が厳しく規則化されている。とりわけ、外見(髪型、メイク、服装)には厳しい。自由は余暇の時間にしか残されて

いない。」(同)。そして、その残された余暇の時間に、若者たちが自分たちの手本にしたのが、ヴィジュアル系バンドのミュージシャンたちであった、としている。とりわけ若い女性の「コスプレ」は、ドイツのみならず欧米亜問わず、世界中に広まった現象といえよう。「ロリータ・スタイルがヨーロッパやアメリカでますます多くの熱狂的なファンを得ていることは驚くべきことではない。というのも、女の子というのは誰でも、プリンセスのように見られたいという夢を一度は抱くからである」(KONEKO、2009)。

また、ヴィジュアル系のルーツについても言及している。ヴィジュアル系のルーツは、1980年代初頭のニューロマンティックとゴシックだとしている。さらに、「日本の歌舞伎座や宝塚歌劇からインスピレーションを受けたDavid BowieやKISSやTwisted Sisterといった西洋のロックミュージシャン」の他、Visage、Siouxsie and the Banshees、Alien Sex Fiendなどが、ヴィジュアル系のルーツだとされている。

さらに、ヴィジュアル系の元祖が誰なのかについての議論も掲載されている。「どの日本のミュージシャンが最初に化粧をして登場したのかについては様々な議論がある。一般的にいて、ヴィジュアル系スタイルのパイオニアはXというバンドと考えられている。Xがこのヴィジュアル系スタイルに属していないと説明される場合もあるが、それでも一般的にはそうなのである」(同)。Xをヴィジュアル系のパイオニアとみない考え方を踏まえつつ、ここでは、Xがヴィジュアル系の元祖とされている。そして、「ヴィジュアル系の急速な広まりは1990年代に起こった。LUNA SEAやMALICE MIZERといったバンドが、この時期に、日本におけるヴィジュアル系スタイルを固有な流行トレンドとして定着させることに成功した」(同)、としている。

また、トランスジェンダー論の文脈でも語られている。「西洋諸国では、日本のヴィジュアル系ミュージシャンたちは、そのほとんどが男性で、その多くがアンドロギュノス的(中性的)だったので、たびたびホモセクシャルやトランスジェンダーの人間と決めつけられた。しかしながら、口紅の使用やヘアスタイルや女性の衣装は、一方で、極東の美の理想や歌舞伎の伝

統から説明することができ、もう一方で、こうした伝統を克服することで際立たせたり、ショックを与えたりする努力から説明することができる」(同)。

以上、ドイツのWikipediaを手がかりに、ドイツでのヴィジュアル系の捉えられ方をみてきた。ヴィジュアル系は、このように確かに海外に伝わっているのである。

さらに、ドイツでは、既にヴィジュアル系バンドが登場しつつある。その中で一歩先を抜け出しているのが、CINEMA BIZARRE(2007～)であろう。メンバーのなかには日本語で「デイルアングレイ」のカタカナ文字の刺青しているメンバーもいる。CINEMA BIZARREのメンバーはなんとドイツの漫画・アニメ博覧会で出会ったといわれている。もともとはグラム・ロックが主体だったが、徐々にPOP、エレクトリック系の要素が加わり、現在はダンス+ヴィジュアル系を融合したユニークな楽曲を奏でている。

TOKIO HOTEL(2005～)は、ドイツで熱狂的な人気を博したロックバンドである。ドイツでは、あらゆる雑誌の表紙を飾っている。このバンドは、ヴォーカルのBillとギターTomの双子らによって結成されたユニークなバンドである。メイクやファッションスタイルは全然違うが、両方とも美形で、これがドイツ人の若い女性にうけた。瞬く間にメガヒットを連発する最強バンドになった。2006年には、待望の日本デビューも果たしている。サウンド的には結構重たいロックベースに、ドイツ語の歌詞、比較的分かりやすいメロディーがのる。重さと軽さがうまく絡み合ったポップスのようなハードロックのようなサウンドになっている。

LOVEXは、2001年～2002年に結成されたバンドで、2005年にフィンランドでデビューしている。「BLEEDING」、「Guardian Angel」などがフィンランド国内で大ヒット。2006年3月には、待望のファーストフルアルバム「Divine Insanity」をリリース。このアルバムは19週間連続ヒットチャートにランクインした。同年12月には、Within Temptation, Bullet for my valentineなどが所属するドイツ最有力レーベルGUN Recordと契約する。2007年2月に、彼らの1stアルバム「Divine Insanity」がドイツ、スイス、オーストリアでリリース。また同時にツ

アールも敢行した。彼らのサウンドは、80年代のハードロックを基本としたメロディアスなロックである。しかし、彼らを捉える時、ハードロックや北欧メタルの文脈で捉えるよりも、ヴィジュアル系の流れの中で理解した方がより良いように思われる。ポップで伸びのある声。キャッチーなメロディー。ナルシスティックなパフォーマンス。ヴィジュアル系の影響を確かに感じるバンドである。

かくして、ヴィジュアル系は世界のムーブメントになったのである。ヴィジュアル系を語る際、われわれは、国内の現状のみならず、海外の状況を踏まえなければならない。それは、もともとヴィジュアル系が外国のロックに影響を受けて生まれたからというだけでなく、海外のオーディエンス抜きに現在のヴィジュアル系は成り立ちえないからである。それは、マーケティング的な視点においても重要なことではないだろうか。

6 なぜヴィジュアル系は滅びなかったのか？

ヴィジュアル系は、98年以後、危機的な状況にあった。だが、ヴィジュアル系は絶滅しなかった。一過性のブームを超えて、世界へと羽ばたいた。その理由として、「ヴィジュアル系はそもそも相容れない二つの側面をもっており、それが互いにつぶれ合うことで、独自の変化を遂げてきた」、という事実があったのではないだろうか。これはあくまでも筆者の仮説に過ぎないが、今後の研究の課題としてここに書き留めておきたい。

ヴィジュアル系は、既にみたように、そもそも起源が曖昧であり、そのカテゴリーそのものが非常に多義的であった。だが、広義には、これをカテゴライズすることはできよう。最も大きなカテゴリーは、「華やかさ（比喩：白）」と、「ダークネス（比喩：黒）」である。光と影と置き換えてもよい。華やかではじけた仙台貨物（2001～）とダークなナイトメア（2000～）を思い出したい。かつてのLA'rc en cielと黒夢も極めて対照的で、まさに白いバンドと黒いバンドだった。hydeの衣装は白がメインだったが、清春の衣装は黒一色だった。LUNA SEAも黒服限定GIGというライブを行っている。

ヴィジュアル系という言葉が生まれる前に、「黒服系」という言葉があったことも思いだしたい。逆に、BAISER（1991～）やLA'rc en cielや賛美歌（1996～）など、白を基調にしたヴィジュアル系アーティストも現れた。華やかさという意味では、SHAZNA（1993～）以上に成功したバンドもないだろう。SID（2003～）やアンティック喫茶店（2003～：An Cafe）も白いヴィジュアル系の王道である。SIDとthe GazettE、双方が奏でる音は別ジャンルの音楽とあってよいだろう。また、アンティック喫茶店とDir en greyが同じヴィジュアル系という範疇にくくることに同意できる人はいないだろう。華やかさとダークネス／白と黒という比喩を用いずには、美と醜、生と死、POPとUNDERGROUND、女性と男性、そういった二項対立の比喩を上げることができる。女性らしさ（＝女性美）をどこまでも追及するヴィジュアル系バンドもいれば、男臭さをどこまでも追求するヴィジュアル系バンドもいる。

こうした二項対立的な二つの側面は、ヴィジュアル系という概念が登場する以前の80年代後半に既に生じていた。すなわち、東のX、西のCOLORという二つの軸である。エクスタシー系とフリーウィル系といわれたりもする。どちらも視覚を重視した激しいロックがベースになっているが、奏でるサウンドは全く別のものであった。一方は「過激」をウリにして、マイナー調の歌を歌い、人間の内的な激しい葛藤を表現した。他方も「過激」「激突」を掲げつつも、メジャーコードメインで、ポップでシニカルな歌を歌い、スタイリッシュかつパンキッシュなサウンドを特徴としていた。その後、XとCOLORの後輩たちがそれぞれの特徴を生かしながら、二大勢力を拡大させた。こうした背景があって、一方に「ダークさ」、他方に「華やかさ」という二つの側面を生みつつ、90年代以後のヴィジュアル系に継承されることとなった。

また、上述した二つの側面は、同一人物に確認することもできる。例えばXのYOSHIKIは、視覚的には女性的・中性的だが、実際は体育会系ヤンキーであった。瀧川一郎も、見た目の美しさとヤンキー性を共に備えていた。SUGIZOもやはり華やかさとダークさを合わせていた。またBY-SEXUAL（1988～）も、女性性と

ヤンキー性を併せもっていた。

このヴィジュアル系における二つの側面こそ、ヴィジュアル系文化が衰退することなく、一文化として伝承された理由ではないだろうか。もしどちらか一方でしか存在していないとすれば、おそらく「GSブーム」や「イカ天バンドブーム」のように一過性のムーブメントで終わっていただろう。だが、ヴィジュアル系は衰退しなかった。そこには歴としたロジカルな理由があったのではないだろうか。

ヴィジュアル系の系譜を辿ると、クロスカルチャールな「雑種性」があることがわかる。イギリスのニューロマンティック、欧州のゴシックメタル、アメリカのハードロック、日本のBOØWYカルチャー、80年代のJAPANESE HEVEY METALなど、あらゆる音世界が融合する中で、自然発生的に生まれてきた。だが、それに留まらず、ヴィジュアル系は、極めて哲学的なテーマを自ら獲得し、独自の発展形態を保持してきた。その根本には、すでに上述した「白」と「黒」、「光」と「影」が互いに拮抗しあう「振り子運動」があった。あるバンドが白に偏れば、黒によって軌道修正がなされ、黒が支持され過ぎると、今度は白が反逆にでる。

こうした振り子運動は、海外のメディアにおいても確認することができる。海外でのVisual-keiも、やはり二つの側面から語られている。一方では、ニューゴシック系として語られ、他方では、Anime/Mangaの文脈として語られる。欧米のゴシック雑誌では、Dir en grey、Mucc、Despair's Ray、Mana、蜚蜚、最近ではギルガメッシュやSadieなどが連日取り上げられている。また、後者のAnime/Mangaの文脈では、サイコロシエム、宇宙船隊NOIZ、雅、アニメタル、アンティック喫茶店、SIDなどが注目されている。どちらも「コスプレ」と連動するものであるが、音楽スタイル、表現される内容、アーティストとしての精神性は全く別のものである。この両者が互いにぶつかり合うことで、Visual-keiという一つのムーブメントが起動するのである。

このヴィジュアル系の振り子運動こそ、多くのリスナーの心を捉え、飽きさせることなく、新たな音楽スタイルを自ら実現してきたのではないだろうか。ヴィジュアル系とは、音楽を手段とする一つの運動体であっ

て、音楽の一カテゴリーを超える日本の文化である、そう提言して本論を終わりにしたい。

参考文献

- 井上貴子・森川卓夫・室田尚子・小泉恭子 (2003) ヴィジュアル系の時代 青弓社
- ヴィジュアル&ハードショック写真集ショックエイジ・スペシャル (1993) 音楽専科社
- 別冊宝島 X JAPANの総軌跡 (2008) 宝島社
- RANDOM Vol.25 (1990) RANDOM PROJECT
- ロックンf別冊 恐るべき子供達 (1991) 立東社
- J-BEAT-The Japanese Pop Rock Magazin (2009) raptor publishing GmbH.
- <http://blog.goo.ne.jp/sehensucht/e/b0190d30ab889eb29d22e4c3c5c6ffc0>
- http://de.wikipedia.org/wiki/Visual_Kei